日小整会誌（J Jpn Ped Orthop Ass）**22**(2)：293, 2013.
第23回日本小児整形外科学会学術集会　主題

小児領域の骨関節感染症

座長：下　村　哲　史

骨関節感染症は，早期に診断を下し，適切な治療を行わないと，罹患運動器の機能を損ない，その後の日常生活に多大な制限を生じる原因となる．特に乳幼児期には，初期治療が遅れると，関節破壊の程度が強くなり，その再建が困難となることも少なくないため，慎重な対応が望まれる．しかしながら，乳幼児期の骨関節感染症の早期診断や適切な治療を行うことは，必ずしも容易ではなく，現在でも難渋することが少なくない．

今回，主題として発表された演題の中では，診断に関して太田ら（都立小児総合医療センター）は，早期診断をする際には，検査データの信頼性が低く，臨床症状に重きを置いて，精査すべきかどうかの判断をすべきであることを強調しており，また，岡野ら（熊本赤十字病院）は，化膿性仙腸関節炎の診断の難しさについて述べている．治療に関しては，伊藤ら（名古屋市大）は，化膿性股関節炎において骨髄炎合併例，切開・排膿の遅れた例で治療成績が悪いことを述べている．また，従来MRSAによる化膿性股関節炎の治療成績が劣っているとの報告が多かったが，平良ら（埼玉小児，日本大学ほか）は，耐性菌であっても適切な治療が行われれば，特に治療成績が悪くならないことを報告している．さらに，長尾ら（日本大学，埼玉小児ほか）は，乳幼児の化膿性足関節炎であっても，関節鏡視下に洗浄・デブリードマンが可能であることを報告している．

いずれも，有用な情報が多く，討論も活発に行われ，有意義な時間であった．